



私たち家族にとつて長年にわたつての謎（なぞ）であり、また、関心の的でもあつた「白い家」の正体がわかつたのは、ちよつとしたきつかけからだつた。私たち四人と犬一匹には、ある決まつた散歩コースがある。そのコースの途中に、広い芝生の庭にたつむ白い家を見つけたのはいつのことだつたらうか。どんな人が住んでゐるのだらう、家の中はどうなつてゐるのだらうと、一匹を除いた四人の想像力は飛躍する一方だつた。

そんなある日、近所の花屋さんに何げなく立ち寄つた私は、突然花屋のNさんに絵に興味があるかと尋ねられた。もちろんあると答える私に、それでは知り合ひの画家を紹介しようという申し

出。そして、その数日後に連れていかれたのが何とあの白い家。心底驚くとともに、謎が解けたうれしさでいっぱいになつた。白い家は、十三年間パリに在住したK画伯の大切なアトリエだつたのだ。

ピカソはパリでサロンをつつたが、サロンに入りできたのは彼の眼鏡になつた超一流の人はかりだつたとか。メンバーの中には、同じ画家仲間だけでなく、哲学者、物理学者、建築家といつた一見絵画には関係のない人たちも含まれてゐたが、それは彼自身の絵画

「白い家」の謎

亀井 創太郎

もいえる味わい深き至上の一時となつた。とにかく話が面白い。例えば、K画伯が好きだというピカソのエピソードはこうだ。

ピカソは、青の時代、バラ色の時代を経てキュービズムに進む絵画の革新者であり、生前中に高名を得た数少ない芸術家の一人だ。話によれば、

スの上で多くの色が調和する魅惑。画家たちの作品制作のスピードなど。

絵画鑑賞を趣味と自称している私は、芸術の奥深さをいや応なく知らされた気がした。そして、白い家の謎が解けたと思つたら、再び美という謎に直面することになつてしまつたのである。

ピカソの天才にしても、背景にはサロンでの美の探究活動があつたわけだから、旗本でも一流の謎解きに挑戦するサロン活動がもっと広がればいいと思う。そして、ルネサンス時代のメディチ家の当主がその理想のタイプとされてゐた「有能な経営者にして教養人」の域に、一歩でも近づきたいものだ。

（亀井通産社長）